

序

令和4年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから12年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、10年目になる年でした。当センターは救命救急病床30床、感染症病床10床を含め、総病床数388床を有し、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院としての機能に加えて、泉州救命救急センターを併設し、極めて重要な医療機能を有する高度急性期病院です。母子医療では市立貝塚病院と泉州広域母子医療センターを共同運営し、泉州の産科医療・新生児医療(NICU)の中核としての役割を果たしています。当センターは全国的に有名な国際診療科を有し、海外からの旅行者と大阪在住外国人の診療も行っており、平成28年度末に国際診療科を改装し、平成30年10月に外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の3回目認定更新を行いました。消化器内科、眼科、呼吸器外科等の一部診療科の医師が不足していましたが、眼科の常勤医1名が入職し、消化器内科4名、呼吸器外科2名、糖尿病・内分泌代謝内科5名の体制となり、糖尿病センターや甲状腺センターを開設し、人材が充実してきています。

当センターは平成30年4月にDPC対象病院の中でII群、DPC特定病院群(大学病院本院と同等の高度良質な医療を幅広い疾患に対して提供できる病院)に指定され、大阪府下でも極めて限られた高機能病院の仲間入りをし、令和元年3月には日本医療機能評価機構から5回目の病院機能評価の認定(バージョン:3rdG:Ver.2.0、一般病院2)を受け、令和2年3月にはNPO法人卒後研修評価機構(JCEP)による研修病院の認定を受けており、病院機能も年々充実してきています。大変喜ばしいことに、米国を代表するニュース週刊誌Newsweekが毎年発表する”World’s Best Hospitals 2023” JAPAN版に当センターが選出され、日本で大学病院を中心に197施設、大阪府内では14施設(大学病院4施設を含む)の1つとしてランクインし、世界的に有名な病院の仲間入りをすることができました。

一方、当センターでは泉州南部の病病連携・病診連携の充実のための診療情報連携システム「なすびんネット」を開設し、地域医療連携を積極的に進めてきました。泉州地域の医師会の先生方との病診・病病連携をさらに活性化させるため、平成29年4月にりんくうメディカルネットワークを立ち上げて地域の先生方との積極的な交流・情報交換を行ってきました。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウィズ)』では、シミュレーション機器等を用いた幅広い臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実践しており、初期研修医の人気も急上昇し、研修医数も増えてきました。また、業績欄にも記載がありますように、多くの国内外での学会発表や英文・和文論文の業績も充実し、その量及び質は国内外の大病院に比べても誇れるレベルとなっています。

全国的に見ても平均寿命の短い大阪府の中でも、とりわけ泉州地域では健診受診率が低く、癌や循環器疾患による死亡率が高いことが問題となっています。当センターでは未病の段階での予防医学を推進し、研究マインドをもって泉州地域の特色を活かした事業を進めるため、平成30年4月より「りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)」を開設し、健診受診率を向上させ、生活習慣病や家族性高コレステロール血症などの高頻度な遺伝病の早期発見・治療を目指して、地域の保健師の教育や特定健診の指導等も行っており、着実にその成果が挙がってきています。

当センターは重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備え、我が国に4つしかない特定感染症指定医療機関であり、関西空港に近いという立地で、関西の新興感染症の防波堤という重責を担っています。令和元年末から世界に蔓延している新型コロナウイルス感染者の診療に関しても、我が国で先導的な役割を担い、重症・中等症の患者や外国人患者、透析中の患者や妊婦も多数受け入れ、地域住民の命を守るため、3年以上にわたって病院一丸となって対応してきました。コロナ禍の中でも泉州地域の高度急性期医療を守る最後の砦として、今後も最高・最新レベルの医療を提供できるように頑張りますので、ご支援の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

理事長 山下 静也

序

りんくう総合医療センターは、泉州南部唯一の基幹病院であり、全国に4か所しかない特定感染症指定医療機関の一つです。また、泉州救命救急センターや泉州広域母子医療センターを併設し、災害拠点病院や大阪府がん診療拠点病院などの広域で提供すべき政策医療を担う高度急性期病院です。これらの実績が評価されて、厚生労働省から、DPC特定病院群(全国181病院、大阪府下19病院)の一つに指定されています。また、手術や救急医療などの高度専門的急性期医療の提供体制を確保した病院だけ(大阪府下18病院)に認められる「急性期充実体制加算」の算定も認められており、まさに、「地域医療の最後の砦」として機能することを期待されている病院です。

またこの度、アメリカを代表するニュース週刊誌“Newsweek”が毎年発表する世界のベスト病院2023「World’s Best Hospitals 2023」日本版において、日本全国の大学病院を中心に200施設、大阪府内で14施設の一つとしてランクインしました。りんくう総合医療センターが開院依頼スローガンにしてきた「軸足は地域に、視線は世界へ」を診療・研究・教育において実践してきた賜物であり、今後一層の精進を続けてまいる所存です。

さらに、関西国際空港の対岸という立地上、大阪府外国人患者受入れ拠点医療機関に指定され、外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の施設認定を3度更新しており、国際診療にも力を入れています。令和5年度には4度目の更新を行う予定です。

また、平成30年には、りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)を設立し、健診・人間ドック部門を充実させました。大阪府下でも特に低い泉州地域の健診受診率の増進を図り、病気の早期発見、早期治療に結びつけるとともに、当地域の未病対策にも取り組んでいます。令和5年度には、このRICWAを「先進医療開発センター」に発展的に改組し、先進医療の開発や臨床研究の拠点を目指します。

さて、令和2年3月4日に当院での一症例目となる新型コロナウイルス感染症(COVID-19)入院患者を受け入れてからというもの、COVID-19患者とその他の一般入院患者の診療を如何に両立させるかに腐心した3年間でした。大阪府の要請に従い、最高で重症病床15床と中等症病床28床、トータルで43床のCOVID-19用の病床を確保しました。重症患者は元より、中等症患者も慢性透析患者や出産間近の妊婦、クラスターが発生した高齢者施設の患者など、看護度に加えて要介護度の高い人手を必要とする患者が多く、これらの病床運用に必要な看護師を確保するために、最大で100床近くの病床を休床にせざるを得ない状況でした。それに伴い、COVID-19以外の通常の患者の診療に使用できる病床は388床の内の250床足らずとなりましたが、近隣の医療機関の協力も仰いで平均在院日数を短縮させて対応し、何とか大火なく乗り越えることができました。この間、約1,500名の陽性患者の診療に携わりましたが、半数は圏域外の大阪市内や北摂地方の患者で、このコロナ禍にあっても当センターが如何に重要な役割を担ったかが分かります。

本来であれば高度急性期病院として専門医療を推進し、一方で地域医療支援病院として急性期離脱後の後方連携や在宅医療の後方支援体制を強化して、地域包括ケアシステムの構築にも貢献する病院を目指す心積もりにしておりましたが、残念なことにCOVID-19の対応に翻弄された3年間余りであったと言わざるを得ません。

新型コロナウイルスの動静に関しては、今後もまだまだ予断を許さない状況ではありますが、りんくう総合医療センターはいかなる状況にあっても、当地域の医療を守る最後の砦として、皆様方に納得して頂ける医療を提供して参りますので、今後もご支援のほど宜しくお願い致します。

この度、令和4年度の年報を編纂しましたので、皆様にお届けさせていただきます。

病院長 松岡 哲也